

SGHを軸にした学校改革

全校体制による課題研究で、
生徒の学びを深めさせ、
社会への広い視野を育む

変革のステップ

背景と課題

- 学力向上を実現したため、次なる目標として「グローバル人材の育成」を目指した

実践内容

- **課題研究を推進する体制の整備** 2014年度、SGH(*1)の指定校となり、1年次の学校設定科目「Local Water Issues (LWI)」、2年次の学校設定科目「Global Water Issues (GWI)」で課題研究を推進。チーム・ティーチングにより、全教科の教師が課題研究にかかわる体制を構築している
- **「論理的思考力テスト」の開発** 課題研究の成果を客観的に把握するため、教育学研究者の助言を得ながら、論理的思考力のアセスメントを独自に開発
- **英語の指導改善を推進** 2018年度、静岡県教育委員会の「英語教育コアスクール」の指定を受け、「英語でやり取りする力」を培うために指導改善を進める

成果と展望

- 様々な教科の知識を融合して考えられる生徒が増加
- 生徒の視野が広がり、進学実績がさらに向上

PROFILE



旧制・静岡県立三島^{たが}高等女学校として開校。校訓に「自律」を掲げる。2004年度、共学校となったのを機に学校改革に着手。14～18年度には、同県内で唯一のSGH指定校となり、全校を挙げて課題研究を推進している。

設立	1901(明治34)年
形態	全日制/普通科/共学
生徒数	1学年約280人

2018年度入試合格実績(現浪計) 国公立大は、筑波大、お茶の水女子大、東京外国語大、横浜国立大などに112人が合格。私立大は、上智大、東京理科大、立教大、早稲田大などに延べ682人が合格。

住所	〒411-0033 静岡県三島市文教町1-3-18
電話	055-986-0107

Web site <http://www.edu.pref.shizuoka.jp/mishimakita-h/home.nsf/IndexFormView?OpenView>

「学力向上を実現し、新たな目標「グローバル人材の育成」を設定

静岡県立三島北高校は、2004年度、女子校から共学となったのをきっかけに、学校を挙げた指導改善に着手した。まず、3年間を通して土曜講習や週末課題を継続するなど、学力向上対策を推進する体制を整えた。次に、特進クラスを設置し、学習指導・進路指導を強化。すると、同クラスの生徒の頑張りや他クラスの生徒を刺激し、高みを目指そうとする意識が学校全体に浸透していった。そうした段階的な改革によって進学実績は向上し、国公立大学への合格者数は、女子校だった頃から倍増した。

14年度には、次なる目標として「グローバル

*1 文部科学省のスーパーグローバルハイスクール。

*プロフィールは2019年3月時点のものです。

人材の育成」を掲げ、SGHの指定校となった。SGH推進室長である英語科の稲葉亜矢子先生は、次のように語る。

「本校では、生徒の教科学力が向上する中、国際社会に貢献できる『グローバル人材の育成』という新たな教育目標を設定しました。その達成に向けた第一歩として、SGHの指定を受け、事業や授業の改善を行ってきました」

生徒の実態を適切に把握し、課題研究の指導に反映させる

同校のSGHにおける課題研究では、生活に



教務主任
飯田美穂 いいた・みほ
教職歴29年。同校に赴任して4年目。国語科。生徒「First」

進路指導主事
川村陽一 かわむら・よういち
教職歴27年。同校に赴任して5年目。英語科。「個々の生徒を大切にして、生徒一人ひとりの希望進路の実現を目指す」

英語科
中島由美 なかじま・ゆみ
教職歴24年。同校に赴任して2年目。SGH推進室。「The road to success is always under construction.」

SGH推進室長
稲葉亜矢子 いなば・あやこ
教職歴22年。同校に赴任して6年目。英語科。「生徒とともに成長できる教師でありたい」

欠かせない資源である「水」を取り上げる(図1)。

1年次には、週1回の学校設定科目「Local Water Issues (以下、LWI)」で地域における水の課題、2年次には、週2回の学校設定科目「Global Water Issues (以下、GWI)」で世界における水の課題について、グループごとにテーマを設定して探究する。水ジャーナリストの橋本淳司氏を始めたとする水の専門家を講師に招き、生徒にアドバイスをしてもらおう機会を積極的に設けている。両学年の3学期には、各グループが探究の成果を英文のポスターにまとめ、代表のチームは事業報告会などで発表する。そして3年次には、2年間で探究した水の課題について、生徒一人ひとりが英語で論文を書く。課題研究の中核を担う取り組みである1年次のLWI、2年次のGWIでは、生徒の実態を適切に把握し、指導に反映させることを重視。各グループに教師の目が行き届くよう、チーム・ティーチングを行っている。LWI・GWIに携わる全教師は週1回集まり、指導を振り返りながら、各グループの進捗状況や課題などを共有。次回の授業の指導案を検討・修正している。

「課題研究は、生徒が社会で必要とされる問題解決のプロセスを体験し、主体的に学びを深めるための取り組みです。水についての研究は、あくまでも手段であることを教師間で常に確認しています。そうした中で、生徒に問題解決のプロセスを意識させるためのア

図1 課題研究の流れ

時期	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
1年次のLWI	初期指導	基礎学習	課題設定	フィールドワーク		日本語ポスター作成		成果発表	英文ポスター作成		成果発表	GWI準備
2年次のGWI	個人エッセー作成					英文ポスター作成	海外研修		成果発表準備			
1・2年次の海外研修(※)	成果発表準備		課題設定	海外研修	英文ポスター作成							
3年次			成果発表									

※希望者を対象に実施。
*学校資料を基に編集部で作成。

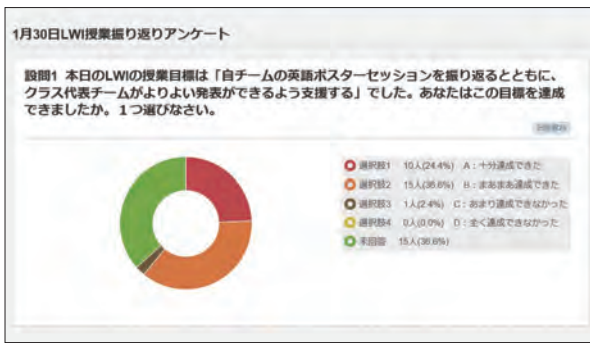
アイデアも生まれました」(稲葉先生)

1年次のLWIでは、段階的にゴールを設け、振り返りの場を多くした。毎回の授業後、グループごとに進捗状況や課題、改善点などを「Classi」(※2)に入力させ、他グループに参考にしてほしい振り返りがあれば、次回の授業で担任が紹介している。

「こまめに課題を洗い出し、改善を図ること、生徒たちは学びを深めていきます。そ

* 2 株式会社ベネッセホールディングスとソフトバンク株式会社の合併会社である Classi 株式会社が提供する、学校教育でのICT活用を総合的に支援するサービス。

図2 Classi を活用した生徒アンケートの集計画面



生徒には、本時のLWI・GWIの授業目標の達成状況や、次回の授業に必要な準備など、課題研究についてのアンケートを定期的にClassiで配信している。SGH推進室では、その回答を集計し、全教師で共有。課題研究の指導改善やプログラムの充実につなげている。

*学校資料をそのまま掲載。

生徒の論理的思考力を客観的に測り、多面的・総合的評価を推進

課題研究をより充実させようと、取り組みの成果検証にも力を入れている。同校が独自に開発したのが、全生徒を対象とする「論理的思考力テスト」だ。16年度、SGH推進室のメンバーが他校への視察などによる情報収集を始め、17

うして探究する面白さを実感し、より広い分野の文献を調べたり、改めて実験を行ったりするなど、次第に粘り強く取り組み生徒が目立つようになり「稲葉先生」

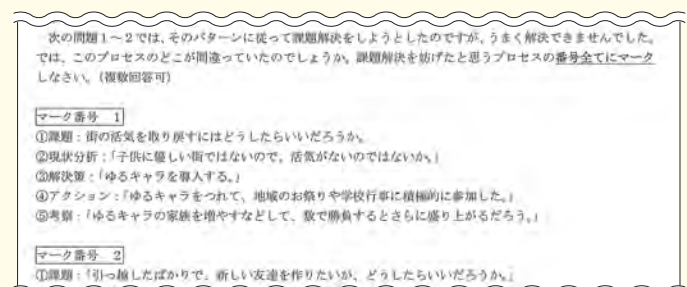
また、Classiは、生徒の振り返りだけでなく、プログラムをより充実させていくためのフィードバック機能としても活用している(図2)。

年度には試作テストを実施した。ところが、試作テストは時事的な設問が中心であったため、課題研究によって生徒に論理的思考力が身についたのかどうかを把握できるものではなかった。そこで、認知科学などを専門とする静岡大学教育学部の河崎美保准教授のアドバイスを得ながら、「生徒に考えさせる」「問題解決における手法の効果の妥当性を問う」といったポイントを意識して内容を練り上げていった。

そうして完成したのが、18年9月に実施した問題だ(図3)。それは、①課題解決のプロセスのどこに課題があるのかを見つける設問、②日本語の文章における接続詞の正しい使い方を選ぶ設問、③「ふるさと納税は促進されるべきだ」という主張に対する複数の意見を示し、それらの意見が論理的に正しいかどうかを判定する設問の3つで構成されている。同テストの結果を分析し、模擬試験の結果と比較したところ、1年生では論理的思考力が高い生徒ほど教科書力が高くなっていたという。SGH推進室に所属する英語科の中島由美先生は、こう話す。

「1年生が受ける模擬試験では、20年度に始まる『大学入学共通テスト』を見据え、論理的思考力を求められる問題が増えました。そうした中、本校の論理的思考力テストと模擬試験の結果に相関があったということは、本校が想定する論理的思考力は、新しい大学入試で求められる資質・能力に対応しているのかもしれない。その検証は今後の課題で

図3 2018年9月実施の「論理的思考力テスト」



「論理的思考力テスト」は、朝読書の10分間に全生徒を対象に実施。作問にあたっては、生徒が取り組みやすいよう、短く簡潔にすることを心がけたという。

*学校資料を基に編集部が一部改編。2018年9月実施の「論理的思考力テスト」の全体は、ベネッセ教育総合研究所のウェブサイト(https://berd.benesse.jp)でダウンロードできます。「HOME→教育情報→高校向け」をご覧ください。

生徒の英語力をより高めるべく、英語で考えさせる場面を増やす

また、論理的思考力を適切に把握できるようにすれば、これからの大学入試や次期学習指導要領で重要性が高まる多面的・総合的評価の推進にもつながります」

課題研究での英文によるポスターセッションでは、生徒の英語力の課題が顕在化した。発表では堂々と考えを述べる生徒が多い反面、質疑応答に移ると、質問をする生徒は少なく、また、質問が出て、それに対して思うように英語で

答えられない生徒が目立ったという。

「本校の生徒の多くは、時間をかけて英語で考えをまとめ、プレゼンテーションをするのは得意です。一方、臨機応変に考え、話すことが求められる場面になると、英語が出てこなくなってしまう。グローバルに活躍するためには、何も準備していなくても、英語で話せる力が必要です。そこで、とつさの受け答えが求められる場面を授業に設けることにしました」（中島先生）

その一環として、17年度からは、毎回の「コミュニケーション英語」の冒頭3分間で生徒同士のペアワークを行っている。18年度には、静岡県教育委員会の「魅力ある学校づくり推進事業」における「英語教育コアカスールの指定を受けたこともあり、生徒同士が「Why?」「How?」などを用いて質問し合うなど、多様なペアワークを行った。

「英語教育コアカスール」の取り組みとしては、海外の高校生や大学生と交流する場面も増やしている。その1つが、英語のイベントなどに取り組む部活動である国際交流部が企画したプレゼンテーション大会だ。近隣の高校数校に加え、ベトナムの高校生がインターネットのテレビ電話機能を用いて参加した（写真）。

「今回のプレゼンテーション大会では、学校の代表という意識が生まれたためか、生徒は、より意欲的に練習し、本番に臨みました。18年度は国際交流部の生徒から出場者を選抜

写真 2018年8月の海外研修では、ベトナムの高校を訪問した。19年3月のプレゼンテーション大会では、海外研修の訪問先の生徒たちがインターネットのテレビ電話サービスを用いて参加し、同校の生徒たちと英語による質疑応答を行った。

2年次まで幅広く学べるよう、19年度から教育課程を改訂

同校のSGHの指定が18年度で終了したことや、次期学習指導要領への対応というねらいから、19年度には教育課程を改訂する。「総合的な探究の時間」（以下、「総合探究」）では、SGHでの課題研究を引き継ぎ、SDGs（*3）をテーマとする探究学習を行う。

現行教育課程からの最も大きな変更点は、3年次から文系・理系に分かれるようにしたことだ。同校には、3年次に理系から文系に変える生徒や、力を入れる教科・科目を早い段階で絞る生徒が少なくなかった。そうした生徒は、3

年次の後半に学力が伸び悩む傾向にあるという。そこで、2年次までは幅広い教科・科目を学べるようにした。改訂を主導してきた教務部で国語科の飯田美穂先生は、次のように話す。

「低学年の段階の学習内容は初歩的なものです。そこで、生徒が学びを深めた段階で主体的に文理選択ができるようにしたいと考えました。バランスよく学ぶことで根本的な問いを立てる力がつくと思っています」

自分のやりたいことに主体的に挑戦する生徒が増えた

SGHを軸にした学校改革の成果は、生徒の姿に表れている。課題研究では、教科学習で習得した知識・技能を応用し、問題の解決策を提案できる生徒が目立つ。教科学力も伸び、国立大学には毎年100人以上が合格するようになった。また、社会への視野を広げ、将来海外で働くことを希望する生徒も多い。進路指導主事の川村陽一先生は、生徒の変化を次のように語る。

「以前は、ほかの生徒と一緒に動かなければ動かない生徒が少なくありませんでした。しかし、現在の生徒は、自分から進んで行動できるようにになりました。自分のやりたいことを見つけ、主体的になれているのだと思います」

今後は、「総合探究」における探究学習が学校改革の中心となる。「論理的思考力テスト」も問題点を改善しながら継続していく予定だ。

* 3 Sustainable Development Goalsの略。2015年に国連が掲げた、持続可能な開発目標のこと。①貧困をなくそう、②飢餓をゼロになど、17の目標と169のターゲットから成る。